

子供や家族を通して、分子研以外にも基生研や生理研の研究者の方々とも知り合え、本当に人との出会いに恵まれた日々でした。研究者としてはそろそろ出て次のステップに進みたいと思いつつ、岡崎での生活は公私ともにとても充実した日々だったので、出所できたことはとても喜ばしいことですが、岡崎を去ることに寂しさも感じています。

2020年からは一転して新型コロナの世界的大流行で、どこも大混乱に陥っています。そんな中9月末にひっそり

と分子研を去り、九州大学先端物質化学研究所へとやってきました。新天地では、新たな研究室を立ち上げる機会に恵まれ、ずっと使われていなかった部屋の改修からスタートし、文字通りゼロから研究室を作り上げている日々です。私がいる筑紫キャンパスは九州大学のメインキャンパスではないため、学生も少なく静かであり、分子研と似た環境です。新天地ではまだ居心地の悪さを感じますが、また充実した日々を過ごせるよう、今後とも一歩ずつ進んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、大峯、川合両所長をはじめ、斉藤教授、秋山教授、秘書の千葉さんおよび斉藤グループの皆さんには大変お世話になりました。また、理論フロアの皆様や様々な活動を通してお世話になった多くの皆様には、名前を挙げきれませんが深く感謝しております。どうもありがとうございました。

覧古考新27 | 1998年

数年前、つつじの季節にカナダNRCの研究者が訪ねてきた。彼は、研究棟のわれわれの部屋からの眺めに飽くことなく見とれていた。オタワの夏はとくに美しいが、その地に住む人からの称賛である。この称賛は赤松先生に負うところが大きいと思う。先生は環境整備に大変気を使っておられた。実験棟の化粧タイルを選ぶのに多数の見本をとりよせ、旧図書館前でためつすがめつしておられたお姿が思い出される。長い時間保存されるものには贅沢と誇られる程金を使えとっておられたように思える。貧困な環境に馴染むことは恐ろしい。いとも容易に同化し、やがては精神の高揚まで失われてしまう。

.....

先生は、基礎研究といえども社会的ニーズと無関係ではありえないという主張をお持ちで、このニーズを先見性的に見通すことが基礎科学を担う者に課せられた重大な責務であると考えておられたようである。早くからエネルギー問題に関心を寄せられ、分子科学研究所が特別研究の一課題としてこれを取りあげたことを誇りにしておられた。「昨今は猫も杓子もエネルギーを口にすると」後年苦々しげに言っておられたのを記憶している。次の時代の社会的ニーズは何とお考えだったのだろうか。一度先生からゆっくりとお考えをきかせていただきたく思っていたのに残念である。

.....

赤松先生、長倉先生と共に過ぎた分子科学研究所の創設期は終わった。先生方の築かれた土台の上に研究所の飛躍が始まろうとしている。しかし折にふれ「創設期」の精神を省み、そこから多くの教訓を再び学びとりたいたいものである。

分子研レターズ No.19「赤松秀雄先生とともに過ぎた6年間」(1988年)

廣田 榮治 (分子科学研究所教授)